



— 第8話 私説「岡田隆介」論 番外編—

「対応のバリエーション」は、私たちが仕事で出会う様々な「対応」場面をロールプレイで再現し、いろんな対応の仕方を試してみて、感じたことを自由に話し合おうというワークショップ式体験学習です。ゲームみたいな感覚でみんな楽しんでながら、実は、その中から何か日常の業務に役に立つものを持って帰っていただけたらと思っています。（「そだちと臨床」研究会主催 対応のバリエーション勉強会のお知らせより）

さあ、いよいよ私説「岡田隆介」論の最終稿、番外編です。岡田さんについて書かせていただくこと、重ねて4回目となります。1回目は、その臨床の面白さ、ユーモア、意外性について触れたつもりです。源泉は「お笑い」にあるのではと真面目に私は考えていることも書きました。そして、変化の処方箋としてのメタファーの秀逸さと、クライアントそれぞれに対して仕立屋のごとく採寸し、料理人のごとく調理したものを提供する臨床技法を2回目に書きました。ボナペティです。クライアントセンタードいやクライアントファースト、どちらも当たってはいますが、岡田さんの信条は「おもてなし」にあるのではないかと確信した次第です。自分で書きながら、こんな独断的なことを記述してよいのかと思ったりもしますが、よいのです。3回目は、前回までの2回を通して熱く語りすぎた自分をやや反省しながら、岡田さんの臨床の理論的背景を裏どりするように、真面目に分析したつもりです。ここでこのシリーズに終止符をうってもよ

いのですが、なにか一縷の物足りなさを感じました。岡田さんのメタファーを借りれば、残尿感を感じたということでの4回目です。では、もう一度トイレに。いや、そうじゃない。メタファーでした。今回は、岡田さんのヒトトナリを掘り下げる切り口として、「パワポ職人」「趣味人」「熱い漢」を取り上げようと思います。

1. パワポ職人

スマホでググると、「パワポ職人」という言葉がいくつかヒットします。実はこの言葉を初めて聞いたのは、岡田さんからだったと記憶しています。あまり自分の志向性を語りたがらない人だと思っています。なんか多くを語るのが、気恥ずかしいと思われるのではないかと、話をしたり、LINEでやりとりしたりすると感じます。そんなんで考えていたら、ちょうど京都弁で「きすつない」という言葉が思い浮かびました。京都人ではありませんが。きすつない=気づまりだ、恐縮だ、こころ苦しい、とい

うニュアンスです。岡田さんは、決して寡黙ではなく、おしゃべり好きなのですが、あまり自分のことを語らない気がします。自分がこう思ったとか、こう考えたとか、オチのある話なんて大好きです。でも、オレって、これが好きとか、だからこういう人とか、昨日こういうことがあってとか、自分の周囲にあることはあまり話題にしない。いわゆる Facebook 的な語りはしない。実際、私に Facebook を勧めておきながら、ほとんど自分のストーリーを載せてなかったことから、断定できます。そのお方が「パワポ職人」になりたいと自らおっしゃるので、そういった入れ込み具合であり、私も覚えていたわけです。まあ、岡田さんや私の周辺には、Facebook 番長とも形容される団士郎さんがおられるので、どうしても発信するより、見る側になってしまいますわね。

岡田さんのパワーポイントに関する感想です。まず、活用させていただいてるので、感謝です。常用している「こんなときどう言う？(家庭教育編)」については、左端のインデックスとページを対応させているアイデアには、使い勝手の良さにまずびっくりしました。ちょっとなに言ってるかわかんないかもしれませんが、左端のインデックスを白抜きにしてページと対応させているので、いま、どんな場面のスキルについて見せているのか一目でわかるわけです。それだけではなく、常にいま表示されている内容以外のインデックスも同時に眺められるので、次にどこのページに跳ぼうかということも考えながら見られるわけです。たぶん岡田さんは、専門家あるいは保護者がこのパワポを見ながら、一人で気楽に学習でき

ることも想定して、こしらえたのかなと感じました。eラーニングですわ、知らんけど。

あと、岡田さんのパワポ作品に感じることは、色使いの明確さです。綺麗です。エッチが効いているといいましょうか、一度見ると忘れられない色味だと思います。たぶん、何千回とはいいいませんが、何通りもの色を組み合わせて、にやにやする岡田さんの顔が私には見えます。

それから、家庭教育編以降のものについて、言及すると、登場人物の選定にも試行錯誤が見られます。市販のものから引っ張ってくるのだとおもいますが、ある時は、団さん作のイラストから人物を選ばれた時期もあったように思います。現在は、黒いシルエットの人物に馴染みがあるようにヘビーユーザーの私の感じるどころです。この辺りベタな主観なので、岡田さんに叱られる前に謝っときます。

また、岡田さんのパワポの一枚あたりに込められる情報量が非常に多い。はっきり言って多すぎる。これは、最近の傾向です。じっくり見て、考えないとわからない。だから、説明してよとお願いしたくなる。でも、ご本人は作品を作っちゃたらそこで終い、あとはそれぞれで考えてよという方向性です。この熱しやすさと醒めやすさも岡田さんならではのですね。岡田さんの講演もしくは漫談を望む多くの聴衆が存在する理由は、この辺にあるのかと思います。

あと、オタクだな、病だなと感じたエピソードをひとつ。ある研修会の帰り、お茶しました。因みに岡田さんは、お酒は飲みません。うけつけないと聞いてます。盟友の団さんもお酒に関しては同様で、妙な符合を感じます。岡田さん本人に尋ねると、斜め 45

度を見つめながら「酒はやめたんよ。昔浴びるほど飲んでてさあ。辛い過去があるから。聞きたい？」とかショートコントに入ろうとするので、めんどくさいので尋ねません。肝心のエピソードです。会話のなかで「最近のパワポはどう？」と私。「まあ、ぼちぼちかなあ。それより、最近、こんなフォント見つけたんよ。実にユニーク(と言いつつ、スマホで画像を見せてくる)。なっ、このアール(曲がり具合)たまらんでしょう。これ、こんどパワポの見出しに使おうと思うんよ。全体の印象が違ってくるでしょう、いやーフォントっとホントに奥深いわ、なんちゃって」無理に笑って、共感したようにみせましたが、ひきました。これが、たぶんパワポ職人の情熱なんだとは思いました。

2.趣味人

お酒は飲みませんが、その分多趣味な岡田さん。情報の断片から、想像を逞しくして、綴ります。

カラオケ

カラオケ、大好きです。音楽自体が大好きなんでしょう。それこそ最新のヒットチャートにあがっている曲から、スタンダードで歌われる曲まで、「オレ、それ知らんわ」とカラオケ屋のソファで口にするのを聞いたことは、滅多にありません。ただ、何人かで連れ立って出かけたのに、自分は歌わずにその会は終わりのこともありました。勝手にリクエストして人に歌わせることはよくあります。ハモりがお好きなようで、人の歌に勝手にハモっている姿は見かけます。カラオケ行こうと言い出した本人が歌わないわけですから、盛り下がりそうですが、岡

田さんの周りの広島の方々は、歌好きでなおかつ歌上手な人ばかりなのです。ゆえに人の歌なんて聴いてない人が多いので、まったくお構いなしに盛り上がります。強いて言えば、歌に囲まれたような雰囲気、岡田さんはお好きなのだらうと思っています。あっ、歌わせたら、上手いですよ。ハモり好きで、ファルセットに自信ありと言っておきましょう。また、カラオケ誘って下さい！

カラオケからの音楽全般

この部分は、まったく私の推測、想像の域を出ませんが、趣味でバンドをやられてたり、楽器収集もされてたりと聞きます。飽きっぽい方なので現在進行形かどうかはわかりません。私とも共通してますが、まずは形から入る方なので、楽器も集めたのではと推測します。ギターでしょう、それもエレキギターでしょうか。フェンダーとかではなく、ギブソンのセミアコ辺りで、JAZZのスタンダードとか演ってほしいですが、カラオケと同じく、ギターは弾かずに眺めて楽しむのかな、知らんけど。

グルメ

グルメである。が、決してグルマンではない。美味しいもん、ちょこっと派である。料理はもちろんだが、甘いもん、特に洋風、ケーキ、チョコレートには目がない、これは事実です。だいたい、岡田さんとは同じく下戸の団さんとともに、会えば居酒屋でなく、喫茶店でケーキセットとともに長話というのがパターンでした。これもずいぶんと昔話になりますが、まだ、今のようにスマホでネット検索なんかない時代のことです。タウン誌や口コミが主流の時代です。当時、私は

こども相談センターと改名以前の大阪市の児童相談所で勤務しておりました。大阪で児童相談所の家族療法の勉強会があり、その研修会の帰りにどこかでお茶しようという話になりました。今ならググれるでしょうが、当時は無理。地元の私がどこか皆さんをお連れしないとイケませんが、叶わず。困ってたら岡田さんが、「たしかこの辺りに、チョコレートの美味しい店があるはず」と言うのです。上本町あたりの雑居ビルばかりで、半信半疑で後を着いていくと、たしかに、その店はありました。今でこそ、チョコレート専門店は珍しくないですが、当時はオシャレな響きでした。店に入り、ちょっとお高めチョコを食したわけですが、そこにいた一堂、岡田さんを畏敬の眼差しで眺めていた気がします。ただ、岡田さんがセットで頼んだエスプレッソコーヒーの量が思いのほか少なかったようで、早くに飲み干してしまい、手持ち無沙汰にしてたのは笑えました。「なかたに亭」、改めてググって見ましたが、閉店となっていました。残念。懐かしい時代の話です。

最近の岡田さんマイブーム

楽器やグルメ以外でも、たぶん幼少期からの嗜みとしての書道、車好き、そして洋服。垣間見るだけの断片情報ですが、なんとなく好きというのではなく、こだわりを感じるセレクションを紹介してきました。

この前突然LINEで見せられたのですが、水彩画です。全然話にも聞いていなかったもので、びっくりしました。承諾してもらい掲載します。どうですか？1 枚目（※無題1）の釣り人の佇まいや、2 枚目（※無題2）の背景にある林のタッチ。何か水墨画を

思わせませんか？心象風景としての寂寥感も私には感じられます。たぶん、水彩画を始めて、そんなに歳月を重ねたわけではない人の絵には見えません。お世辞ではなく、かなりびっくりさせられました。

3. 人となり

さあ、最後のまとめとなってきました。一言ではまとめ切れない多面性を持たれている、それが岡田さんの魅力なのでしょう。だから、語っても語り尽くせない人だと思います。岡田さんの印象を聞かれたら、私はまずは「クール」だと答えるでしょう。必要以上に踏み込まない、自分は自分、その分他者の在り方も認める。この辺りは、団さんにも共通してる気がします。

ではなぜ、これほど、後輩や若い人への吸引力をもっているのか？その要因としては、弱っている人にさりげなく手を差し伸べる姿と言いましょか。その差し伸べ方が押しつけがましくない。たぶん、ご自身もその差し伸べ方に非常に心を砕いているように感じます。その差し伸べ方はエレガントです。私事で言えば、前述するように大阪市の児童相談所に長らく勤めていて、当たり前ですが異動がありました。今思えば、異動なんて仕方がない事なのですが、当時は現実を受け止められず、友人や知り合いに、メールで愚痴めいたことを送りました。岡田さんもその一人でした。まあ、普通のメールには返信なんかない人ですが、その時は、さらりとリターンがあり、詳細は忘れましたが、「こういうタイミングだから、普段いかない研修に参加してみるのもいいかもしれないよ」とありました。さらに、具体的なワークショップ名もあげ、一緒に行かないかと

まで言ってくれました。こちらのことを考えてくれてたんだと、その時は、うれしかった。その記憶は鮮明です。これも岡田さんでしょう。

またもう一つ。これから書くことは、岡田さんのエピソードとして私の記憶の中で改ざんされた事象かもしれませんが、すいません、紛れもない岡田さん像のひとつであります。若いころ研修医として苦労された話は、ご著書なかに出てきます。それに付随して研修医時代の話を聞きました。どうしても言う事を聞いてくれない患者と口論となり、一触即発のところまで及んだエピソード。どうしても言うことを聞かせたかったこと、これは、患者さんの命に関わるようなことだったと思われます。取っ組み合いの喧嘩寸前なんて、今の岡田さんの方法論からは全く出てこないことです。このエピソードについて尋ねたら「無理無理、老体を取っ組み合いの喧嘩とか。死ぬわ」とコメントするかな。ただ、熱い漢の一面は隠し持っておられる。その確信が長年の付き合いから、私にはあります。

これで、私説「岡田隆介」論のシリーズを一旦閉じたいと思います。最後に、岡田さんへのお願いは、ライブでの研修を続けてほしいということです。これは岡田さんの話を聴きたいという聴衆を代表しての言葉です。今後ともよろしく！！



無題 1



無題 2